

## 村山龍平記念館についての一考察

塩 田 昌 弘

### 要 旨

朝日新聞を創刊し、日本を代表する新聞社に育て上げた村山龍平（1850～1933）は、阪神間（神戸市東灘区御影町）にある香雪美術館の美術作品のコレクターとして知る人ぞ知る人物である。一方、村山龍平の生まれた伊勢国田丸（現在の三重県度会郡玉城町田丸）には、村山龍平の功績を顕彰した村山龍平記念館が建っている。村山龍平とはどのようなことを成し、なぜ現代にもその影響を与えている人物なのか。村山龍平は幕末に生をうけ、田丸藩の士族として活躍、明治維新後、大阪に移り住み、明治・大正・昭和のわが国の激動期を逞しく生き抜き、世界の朝日（新聞）を創り上げ、文化に多大の功績を残した人物である。まさに、新聞界の英傑の名に相応しい。

この小論では、村山龍平の人となりと当時の社会の動き、村山龍平記念館の活動と建築について考察しようと思う。さらに、香雪美術館の所有する旧村山家住宅（国重要文化財）を併せて紹介しようと思う。小論により、近代日本の黎明期を生き抜き、実業界のみならず文化・美術の方面にもその才能の華を咲かせた村山龍平の成そうとした志のもつ今日的な意義を考察したい。

キーワード：村山龍平、朝日新聞、玉城町、香雪美術館、村山龍平記念館

〔目次〕

はじめに

I. 村山龍平記念館の生成

II. 村山家の系譜

III. 村山龍平の生涯

IV. 香雪美術館について

おわりに

図版

注と参考文献

はじめに

敷島の 大和心を 人間はば

朝日に匂ふ 山桜花<sup>1)</sup>

(本居宣長)

吹く風を 勿来の関と思へども

道もせに散る 山桜かな<sup>2)</sup>

(源義家)

朝日新聞の創設者である村山龍平は、1850年（嘉永3）、伊勢国田丸に生まれた。その後、大阪に移り住み、1879年（明治12）朝日新聞社を創設し、社会事業、文化事業に多大の功績を残しました。故郷の玉城町に村山龍平記念館が設立され、また、神戸市御影町には香雪美術館も設立され、現在も教育、美術、文化界に大きな影響を与え続けています。本稿では、村山龍平の人となりとその社会背景、記念館と美術館の事、さらに、旧村山家住宅（国重要文化財）を紹介し、文化人と実業家の両分野で活躍した大人物、村山龍平の志を考察しようとするものである。

I. 村山龍平記念館の生成

村山龍平は、嘉永3年（1850）、伊勢国田丸に生まれた。長ずるにつれて、才能を著わし、『朝日新聞』を創業した。明治、大正、昭和を通じて、常に言論界をリードし、政界、財界は元より、美術界にも多大の影響を与え続けた。そして、昭和8年（1933）、兵庫県御影の自邸にて84歳の生涯を閉じるが、氏の残した『朝日新聞』は今日においても社会に燦然とその光をなげかけているのである。

村山龍平は不世出の財界人、言論人と言えるが、一方、文化人・美術収集家としての

面を持っていた。また、大いなる郷土愛の持ち主でもあった。明治4年（1871）、明治維新の余波のため、一家を挙げて大阪に移り住み財界人として歩みはじめ、明治12年（1879）、朝日新聞社を起業し、第一号を創刊する。その後、村山龍平は、自分を育ててくれた三重県田丸町に多くの寄贈をしているのである。以下、その主なものを列挙してみ<sup>4)</sup>る。

久野家菩提所の大得寺が大正5年2月火災に逢ったおり、翁は1万円の祠堂金を寄進して、同9年の寺再興に尽力している。

次いで、大正15年1月には、田丸尋常高等小学校へ1万5千円を寄付して講堂を建て、同時に翁の息女藤子は、ピアノ代金の名目で3千円を寄贈している。

昭和3年のことであった。翁が私財3万円を寄付し、その御陰を以て時の田丸町は、同年6月19日に当時の帝室林野局（旧宮内省所管で国有財産の管理監督官庁）より、田丸城址9町9反6畝28歩の払い下げを受け、城跡は町有となったのである。

昭和7年7月4日には、勝田町に遺る村山家の旧屋敷跡1140坪を寄付している。翁の没後、田丸町ではその高恩に報いるため、頌徳碑建立の議が起こった。幸いまたまた村山家から資金援助を受けて、右の跡地を小公園とし、翁の雅号にちなんで「香雪園」と名付け、昭和9年4月3日に村山長拳御夫妻と息女の臨席を得て「村山龍平翁記念碑」の除幕式を催した。

昭和57年になり、翁没後50周年を迎えるに当たり、顕彰のため「村山龍平記念館」設立の議が持ち上った。今般も翁の息女と令孫からまたもや多額の芳志を得て、城跡旧大手門傍らに記念館が建設された。そして翁ゆかりの品々を陳列し、翌58年4月3日に落成、開館した。

上述の文中に出てくる村山龍平記念館は、玉城町立郷土資料館および図書館と共存する建物であり、玉城町教育委員会の所轄となっている。

玉城町立郷土資料館

村山龍平記念館〔建築概要〕

1. 建築年度 昭和57年度

2. 設計・監理

伊勢市内 第一設計株式会社

（代表取締役 瀧 宏武）

3. 施工者

伊勢市内 株式会社北岡組

(代表取締役 北岡美星)

4. 事業費

本館建築費 134,500,000円

(展示ケース、展示用棚家具類、ハロンガス消火設備等一式含む)

設計監理費(委託料) 4,020,000円

植樹環境整備費 11,600,000円(朝日新聞社・寄付)

5. 建築規模(構造)

鉄筋2階建

建築床面積 延べ 678.00m<sup>2</sup>(約205坪)

6. 工期

着工 昭和57年10月1日

完工 昭和58年3月10日(延べ161日)

7. 竣工・開館

昭和58年4月3日

(村山龍平翁生誕133年祭)

8. 所蔵資料

人文科学資料

(1) 古美術資料 12

(2) 考古学資料 424

(3) 歴史資料 400

(4) その他の資料 81

(5) 写真、その他 26

尚、平成20年度社会教育調査(文部科学省)によれば、この建物は、博物館類似施設で、歴史博物館と認定され、教育委員会の所管として活動をしている。

『三重県玉城町史 下巻』(第六編郷土の人物、第二章近代を照らす群像、第八節村山龍平、六 龍平翁の絶えざる郷土愛一町は大恩を蒙る)には、次の様に村上龍平の徳を結んでいる。

そしてこの時玉城町は、村山龍平翁に名誉町民第一号の称号を贈り、今更のごとく翁の偉大な業績を称え、永くこれを顕彰することとした。翁の栄誉と余沢は千古不易に照り輝いて、まさに玉城町民の誇りであり、その謝恩の念は万代に町民の心の内深く生き続けるに違いない。

## Ⅱ. 村山家の系譜

村山龍平はどのような先祖の系譜から出現しえたのか。『三重県玉城町史 下巻』に、村山家の系譜について記された箇所がある。<sup>5)</sup>

そもそも村山家は、歴代が田丸城主久野氏に仕えた藩士であった。同家の中興初代は村山長兵衛興元で、元和5年（1619）に遠州久野城（現、静岡県袋井市内）から田丸に移封された田丸城主初代久野宗成に随従し、久野庄から和歌山に移った。そして久野家二代宗晴、三代宗俊らに歴仕した。

二代は興元の長男与右衛門興次で、延宝5年（1677）に和歌山において家督を相続し、元禄2年（1689）に主家の命を受けて田丸へ移住し、田丸藩士となった。これが田丸における村山家の発祥である。

また、文武両道の士が出ている。<sup>6)</sup>

五代は興忠の長男勘左衛門道忠である。この人物は馬術の達人であった。

六代は道忠の次男勘左衛門<sup>なかただ</sup>敬忠が継ぐ。敬忠は躯幹が長大、筋骨も隆々としていて、武道に秀でていた。（中略）文久3年（1863）8月、天誅組が大和で挙兵するや、この浪士やこれに連動する流士が、伊勢・大和の国境高見峠を越えてそれ以東の紀藩領へ押し寄せる危険性があった。そこでこれが鎮圧のため紀州藩兵が峠へ出動したが、これには田丸藩兵も参加している。敬忠はこの時の功勞により恩賞を受けている。翌元治元年（1864）3月には馬廻役旗頭を命ぜられた。馬廻役とは領主側近の護衛役をいう。藩主は敬忠の長年の忠勤を嘉し、知行を加増している。

村山龍平の父親は七代守雄という。龍平はこの守雄の志を強く受け継いだと思はれる。守雄に関する記述が前掲書に次の様に記されている。<sup>7)</sup>

敬忠には初め男子がなかった。そこで現、多気郡勢和村下出江の三井与次右衛門の長男守雄を当時の藩制に従い、一旦、閑斎（敬忠）の兄儀左衛門の二男としたあと、村山家に養子として迎え、敬忠の四女鈴緒に配した。この守雄がすなわち龍平の父親である。（中略）天保10年（1839）11月には藩公の命を受けて和歌山へ参り、文学に精励している趣きを以って篤く賞せられている。同年13年（1842）正月からは和歌山藩邸で子弟を教授し、同

14年2月に藩学校の設立と共にその教職に従事し、若干の学問料を賜わっている。

村山龍平の父・守雄は、学問や芸術を深く愛すると共に、財政に明るく、その上、政治にも精通した能吏の武士であったことが想像できる。また、龍平はこの父親の資質を十分受けついでいると考えられる。時は幕末である。開国か佐幕か、尊皇攘夷か、各藩は存続の危機感をもっていた時期であった。この頃、守雄はどうしていたのか。

弘化元年(1844)2月、純固は守雄の和歌山在勤を解いて田丸に帰還させ、独礼格に進めて軍事役を仰せ付けている。<sup>8)</sup>

(中略)

弘化元年(1844)3月には度会郡南島海岸の要点に望楼を建てて外洋の遠見をさせ、更に万一に備えて兵舎を設営するなど、海防の軍備御用掛として重要な職責を果たしている。この際何よりも急を要するのは、海岸線の測量であった。同5年には紀藩領内の外洋沿岸を巡視して、重要箇所の海岸を実測し、砲台築造の際の地点を定めるなど、沿岸警備の準備を進めている。

田丸藩では、守雄が藩の財政事情に精通しているので、嘉永5年(1852)1月に更に勝手役の兼務を命じている。同藩では累年の財政悪化に加え、新式洋式砲の購入あるいは砲台の築造など財務の極めて多難の折柄、勝手役という理財の担当は、その手腕をよほど高く評価されていたものと認められる。(中略)

守雄は慶応2年(1866)正月に家督を相続し、八百左衛門<sup>とおなが</sup>遠長と名乗った。同時に義父敬忠の後を継いで馬廻役に昇進し、明治元年には御側御用人兼勘定頭に栄進している。このころの守雄はその仕事の上で旧幕時代よりも遥かに多忙となり、煩雑な労苦に追われていた。<sup>9)</sup>

以上が、村山家をめぐる歴代の方々の人物紹介であったが、ほとんどすべての方々が、城主への忠節を尽くす士であった事が共通している。<sup>10)</sup>

村山家歴代は久野家家臣として城主への忠節の誠を尽くすことを遠祖以来の遺訓とし、それを忠実に実践してきた。そこで明治維新に際し、明治2年6月17日、田丸城を紀州藩へ引渡しのおり、村山家当主である守雄は城主のために、いわゆる血盟団の一人として奔走したが熱願は叶わなかった。そして久野氏と運命を共にする決意を固め、村山家が旧藩士として受け得られるいっさいの特権を辞退している。

忠節の武士の精神を見ることかくの如しである。

明治維新後、村山家の人々は大阪へ新天地を求め移り住んだ。

<sup>たかただ</sup>  
敬忠は、閑齋と号し、明治7年10月16日死去。

守雄は、明治23年7月26日死去。

露の身を 今日より草に おきかえて  
独り<sup>あべの</sup>安部野に すむ月を見む<sup>11)</sup>

この様な、村山家の清廉な武士の鑑ともいべき血脈の中から、龍平はこの世に生を受けた。そして、大きな、豊かな新聞という文化事業をおこし、生きとし生ける者の発展に尽くすという大事業を成しえるのである。それは、夜明け前の闇夜を切り開く一筋の光明、朝日に似ていた。

### Ⅲ. 村山龍平の生涯

- 村山龍平は、嘉永3年（1850）4月3日、伊勢国田丸に、父守雄、母鈴緒の長男として生まれ、幼名を直輔と称す。

---

- 慶応3年（1867）3月、無禄城番出仕を命ぜられる。剣道のほか砲術を学び、成績拔群のため褒賞される。

---

- 明治2年（1869）5月、版籍奉還のため、田丸を引払い宮川の川端に移る。

---

- 明治4年（1871）2月、一家を挙げて大阪に移住する。12月、父守雄隠居し、家督を相続し龍平と称す。

---

- 明治5年（1872）11月1日、西洋雜貨商を営み、商号を田丸屋とする。

---

- 明治8年（1875）、木村平八の媒酌により津田氏の女安枝と結婚する。

---

- 明治11年（1878）7月、大阪商法会議所が設立され、その議員となる。

---

- 明治12年（1879）1月8日、朝日新聞発行を決定し、持主村山龍平名義にて届出の上許可を受け、社屋を大阪西区江戸堀南通一丁目七番地に設け、準備に着手する。資本主木村平八、経営担当者木村騰。

1月25日、朝日新聞第一号を発刊する。記事はすべて振仮名つきで、一部四頁、縦一尺一寸・横八寸、一頁三段組にて一段三十二号・二十一字詰。第二・三・四頁は一行二十五字詰。定価一部一銭、一ヶ月十八銭。創刊披露のため第一号第二号に限り無代配布する。

3月26日、京都新京極蛸薬師下ルに、初めて京都支局を置く。

6月14日、社屋を大阪西区京町堀一丁目七番地に新築移転する。

6月15日、新築移転祝賀の辞を集録して号外を発行する。これ号外発行の初めである。

9月13日、「小新聞」の型を破り、以後必要に応じて「社説」または「論説」を掲載する。

9月20日、第三頁の末段に初めて「時事偶感」なる論説風の記事を掲げる。

12月15日、新聞代一ヶ月前金二十銭・三ヶ月前金五十三銭に改定する。

12月24日、この年一ヶ年の主な事件を回顧した「明治十二年略紀」をこの日から5日間掲載する。以後毎年末に回顧記事を集録することとなる。

- 
- 明治13年(1880) 3月28日、村山龍平、朝鮮貿易を志し、芝川又右衛門・下河辺貫四郎と三人の共同出資で創業、先ず視察のため下河辺とともにこの日神戸出発、釜山に向う(同年4月5日釜山着、5月16日 大阪帰着)

9月25日、上野理一入社する。

- 
- 明治14年(1881) 1月16日、朝日新聞、この日より持主木村平八の手をはなれ、村山龍平によって一切の経営が行われることになる。

4月、村山社長の名をもって駅通局に新聞輸送料逓減を請願し、直に許可される。全国の諸新聞皆その利益に浴する。

- 
- 明治15年(1882) 2月22日、測候所の気象報告を載せ始める。

8月13日、一千号自祝の花火大会を難波・天神橋間の大川に開く。

- 
- 明治17年(1884) 4月1日、神戸市元町五丁目に神戸支局を開設する。

4月13日、奈良において博覧会の開催あり、わが社より印刷機械と新聞紙を出品し、一等賞牌を受賞する。

12月、社屋移転拡張準備として大阪中之島三丁目三番地の旧宇和島藩邸跡一千百二十坪を買収する。

- 
- 明治18年(1885) 6月24日、社屋を中之島三丁目三番地に移転する。
-



- 明治19年（1886）5月6日、東京京橋区銀座一丁目四番地に東京支局を開設する（支局主任宇野長与茂、通信主任干河岸貫一）  
7月6日、村山龍平夫人安枝死去する。享年30。  
8月7日、村山龍平母堂鈴緒死去する。享年55。

---

- 明治20年（1887）12月5日、村山龍平、大阪府会議員に選挙される。

---

- 明治21年（1888）2月15日、村山龍平、大阪府会議員を辞す。  
3月30日、村山龍平、小林卓斎の長女萬寿と結婚する。  
9月28日、東京朝日新聞社を京橋区滝山町四番地に移す。

---

- 明治22年（1889）1月3日、大阪で発行する朝日新聞の題字に初めて「大阪」の二字をつけ、「大阪朝日新聞」とし、「東京朝日新聞」と相応することとなる。  
11月13日、「国華」第一号発刊される。

---

- 明治23年（1890）4月1日、第3回内国勸業博覧会記事蒐集のため松本幹一を東京に特派する。同博覧会会場の光景を写真木版付録とする。  
7月26日、村山龍平の厳父村山守雄死去する。享年73。守雄は旧田丸藩士で、家督を龍平に譲った後は悠悠自適、歌道に志し、その振興に貢献するところ多かった。

---

- 明治24年（1891）3月18日、村山龍平、大阪府選出の代議士に当選する。  
10月27日、濃尾地方に大地震あり、村山社長、列車中に情報を得て第一報に精彩を放つ。堀田瑳二郎を特派する。

---

- 明治25年（1892）2月15日、議会解散による総選挙行われ村山龍平、再び当選する。  
5月1日、杉浦重剛（天台道士）、東朝客員となり、論説欄に光彩をそえる。  
9月22日、末広鉄腸の朝鮮・浦潮視察記を掲載する。

---

- 明治26年（1893）5月2日、米国シカゴ万国博覧会のため在シカゴの社友津田勇三に博覧会通信を委嘱する。  
6月30日、三宅雪嶺、志賀重昂ら国会新聞を退く。  
8月1日、村山、上野共同出資して「国華社」を経営する。

---

- 明治27年（1894）3月1日、村山龍平、衆議院議員に三度当選する。

3月9日、明治天皇銀婚式奉祝のため、朝日新聞は第一面を総赤刷として祝意を表す。

---

- 明治28年(1895)10月1日、朝日新聞社を合名組織とし「村山合名大阪朝日新聞会社」と改称して資本金を十三万五千円とし、東京朝日は「村山合名東京朝日新聞会社」と称し、資本金を七万五千円とする。
- 

- 明治29年(1896)1月11日、岡野武平死去する。享年49歳。号半牧、別号桐之舎鳳居、明治前期関西文壇の雄。本社創業間もなく入社し、村山社長を助けて経営・編集両方面の重要任務を担当して功績多かった。後の取締役岡野養之助はその長男である。  
7月10日、村山龍平、大阪築港期成会商議員を嘱託される。
- 

- 明治30年(1897)1月11日、皇太后陛下崩御される。13日紙面全部を黒枠囲みとし、奉悼文を掲げて恭弔の意を表する。  
4月29日、村山龍平の長女藤子出生する。  
5月18日、村山龍平、第5回内国勸業博覧会開設準備委員に選ばれる。
- 

- 明治31年(1898)

7月22日、高橋健三(自恃居士)死去する。享年44歳。明治26年1月客員として入社し、同29年9月内閣書記官長となったが、翌30年10月退官後再び客員となっていた。国粹主義を堅持して国政に関する論策多く、教育・美術・文学・演劇等にも造詣あり、紙上に縦横の筆をふるった。

11月16日、原田晋死去する。享年42。明治15年入社以来主として編集に従事し、功績多かった。後の取締役原田棟一郎の厳父である。

---

- 明治32年(1899)4月3日、神武天皇祭に当り、全社従業員、村山社長とともに伊勢神宮に参拝する。
- 

- 明治33年(1900)4月14日、巴里に博覧会開催、記事を酒井雄三郎に嘱託する。

5月7日、東宮御成婚祝賀諸計画を発表する。大朝、東朝とも、両陛下、皇太子、同妃、四内親王殿下の写真版付録を添付する。大阪市奉祝会に装花電燈を寄付する。

6月23日、日本清国に出兵する。

---

- 明治34年(1901)10月1日、村山龍平、大阪史談会発起人となる。
-

- 明治35年（1902） 1月22日、滝精一博士、客員として美術論および記事を担当する。  
2月25日、伊藤博文、欧州より帰朝し長崎に上陸する。東朝社より佐藤真一を特派する。この種訪問記者特派の初めである。  
3月18日、村山龍平、御影の自邸に十八会（紳士茶会）を催す。  
4月7日、英皇帝戴冠式のため村井啓太郎をロンドンに特派する。  
4月8日、北京特派員牧放浪の北京特電、露清密約を報じ上下を驚かす。

- 
- 明治36年（1903） 1月1日、本社募集の「大阪市歌」当選者一柳安次郎およびその当選歌を発表する。  
3月1日、第5回内国勲業大博覧会大阪に開催。連日二頁の博覧会付録をつける。同付録に特別広告を掲載する。  
6月1日、村山龍平、大阪の社会事業興風会の顧問となる。  
9月15日、名優市川團十郎死去する。内藤湖南弔文を草し、論説欄に掲げて芸苑の大損失なることを表白する。  
9月30日、池辺東朝主筆東京より来り、京都に在る山県有朋公を訪問し、対露策につき献言する。

- 
- 明治37年（1904） 1月5日、大朝、二ノ面の短評に初めて「天声人語」の標題を冠する。  
2月8日、日露両国開戦する。  
2月9日、この日午前四時日本艦隊旅順港外に露艦隊を攻撃する。開戦号外を四回発する。  
2月10日、旅順（芝罘柴原打電）、仁川（告天子打電）の戦報を掲載する。大阪梅田停車場前に朝日新聞号外掲示場を設ける。この種施設の初めである。  
2月12日、対露宣戦布告される。  
2月16日、恤兵および遺族扶助義金募集を発表し、村山龍平一万円、上野理一五百円、社員一同五百円を寄付する。  
3月4日、長谷川辰之助（二葉亭四迷）大阪朝日新聞に入社する。（東京在勤）  
4月10日、大阪図書館に記念図書を寄付する。  
5月22日、セントルイス博覧会通信、福富青尊をしてこれに当らせる。  
7月1日、画工赤松麟作入社し、石膏版を始める。  
8月13日、木村琴花、半井桃水旅順包囲軍に従事する。

- 
- 明治38年（1905） 1月1日、旅順陥落、露軍降伏する。号外三度発行する。

1月13日、ステッセル將軍長崎に送られ、会見のため土屋大夢を同地に特派し、会見記を載せる。

5月12日、土屋大夢、北京特派員となる。

5月28日、前日の日本海大海戦捷報初めて伝わり、号外を発行する。

7月25日、小村全権ニューヨーク着、講和談判はニューヨーク特派員福富青尊をして通信させる。

8月29日、ポーツマスにて日露休戦条約の議定書成る。日露講和条約の条件はなはだ不満足なりとて大朝、東朝、この日辺りから挙って反対する。

10月18日、第一艦隊伊勢湾に入港し、神宮に参拝凱旋奉告あり。わが社は「伊勢朝日」を発行する。

10月19日、第一艦隊阿漕浦より横浜に回航、観艦式に臨む。大朝社より岡野告天子、東朝社より服部白眉を特派便乗させる。

11月15日、鹿子木孟郎をして大観艦式の光景を写生させ、絵付録として発行する。

- 
- 明治39年(1906) 4月1日、日露戦役中報道に尽力につき、御紋章付金杯一組を下賜される。爾来年賀式にこれを使用する。

4月30日、東京で行われた凱旋軍隊大観兵式祝賀のため、九段靖国神社前に大凱旋門を建設寄付する。

- 
- 明治40年(1907) 3月10日、渋川玄耳、東京朝日に入社する。

4月3日、漱石夏目金之助入社する。

5月1日、靖国神社大祭に、東郷大将揮毫の「勝」の字を染め抜いたふくさ二万五千枚を、参拝の軍人遺族に寄贈する。

6月23日、夏目漱石の「虞美人草」第一回を掲載する。朝日紙上に発表した最初の小説である。

- 
- 明治41年(1908)、朝日世界一周会を計画し、その会員募集を社告する。夏目漱石の「坑夫」を掲載しはじめる。

6月12日、長谷川辰之助(二葉亭四迷)を露都に特派する。

7月8日、二葉亭の「入露記」を連載しはじめる。

9月1日、夏目漱石の「三四郎」を掲載する。

10月1日、大阪、東京両社を合併し、従来の合名組織を改め合資組織とし資本金六十万円、名称を朝日新聞合資会社とする。村山龍平・上野理一の両名を無限責任社員、上野精一、村山藤子を有限責任社員とする。それと同時に村山龍平社長となり、上野理一

監査役となる。爾後兩名で社長と監査役とを一年交代とする。

- 
- 明治42年（1909）1月25日、大朝、創刊三十年を祝して「国の光」（百頁）を増刊し、読者に配布する旨を社告する。「国の光」は日露戦争略史である。

1月、久松定憲の筆に成る「朝日新聞社沿革」を脱稿、最初の朝日新聞社史である。

5月10日、露国特派員長谷川辰之助（二葉亭四迷）露都よりの帰途、船中にて病死する。享年46。幼より露語を学び、内閣官報局その他に奉職後、明治37年3月入社し、主として文芸欄に麗筆をふるった。露文学界の先覚者で、翻訳「浮雲」、創作「其面影」「平凡」など有名である。

6月27日、夏目漱石の小説「それから」を連載しはじめる。

10月18日、夏目漱石、満州・朝鮮視察に出張し、「満韓ところどころ」を草す。石橋為之介、日本実業家米国視察団に加わり出発する。

10月26日、伊藤博文公ハルビン駅頭にて暗殺される。27・8両日の紙面において事件を詳報し、哀悼の意を表する。

11月1日、上野理一社長に、村山龍平監査役となる。

12月20日、村山龍平、大阪市参事会員に就任し、市政革新に努力する。

- 
- 明治43年（1910）3月1日、上野精一入社し、東京朝日営業部長となる。夏目漱石の小説「門」を載せはじめる。

3月9日、長谷川如是閑をロンドンに特派する。同時に帝国軍艦生駒、南米チリを経由してロンドンに向うあり、これに東朝社宮部敬治を便乗させる。

3月11日、日英博覧会ロンドンに開催につき美術学校教授久米桂一郎に通信を委嘱する。

11月1日、村山龍平社長に、上野理一監査役となる。

12月15日、「東京代々木練兵場にて初めて飛行機を見る」という記事あり。これ大朝紙に出た飛行記事の最初である。

- 
- 明治44年（1911）5月28日、地久節に和田英作謹写の皇后陛下のお写真を大石版刷として読者にわかつ。

11月1日、上野理一社長に、村山龍平監査役となる。

- 
- 明治45年（1912）1月22日、中野正剛を上海に派遣する。

2月1日、夏目漱石の小説「彼岸過ぎまで」を連載する。

2月28日、客員池辺吉太郎（三山）死去する。享年49。熊本に生れ、幼より文筆に長

じ慶応義塾に学んだ。後フランスに留学し、鉄崑崙の筆名でパリ通信を日本新聞に寄せ、文名とみに高くなった。明治29年末入社し、同44年までの間、大阪・東京両朝日の主筆として社論を司り、社の内外に重きをなしていた。

6月8日、9日の両日、米人アトウォーターを聘し、日本最初の民間水上飛行会を兵庫県西宮海岸に主催する。

7月20日、初めて聖上御不例の趣き発表される。それより御容体発表の都度、東西朝日とも号外を発行する。

7月30日、午前零時43分、明治天皇崩御せられる。

- 
- 大正元年（1912）7月31日、明治天皇崩御につき東西朝日とも奉悼の辞をかゝげ、全紙黒枠を囲んで哀悼の意を表する。大正天皇踐祚、大正と改元される。号外を発行して朝見式の詔勅のほか「哀辞」「天皇踐祚」の賀辞等を掲げる。二文とも西村天囚が心血を注いで草したものである。

9月13日、明治天皇大葬儀行われる。この日より三日間、全紙面黒枠をもって囲い、哀悼の意を表する。乃木大将夫妻殉死する。

9月18日、乃木希典大将の辞世の歌および遺書全部を、一頁大の写真として掲げる。

10月2日、中野正剛の「明治民権史論」をこの日より百回に亘り東朝に連載する。

10月10日、碧瑠璃園の小説「乃木大将」を連載する。

11月1日、村山龍平社長に、上野理一監査役となる。

12月4日、西園寺内閣、二個師団増設問題にて総辞職のやむなき情勢となり、内大臣桂太郎、宮中より出でて内閣を組織するやの風説があるので、桂の進退について朝日は連日にわたって痛論し世論の喚起につとめる。

12月6日、夏目漱石の「行人」を連載する。

12月21日、桂内閣遂に成立する。朝日は依然反対論を継続する。

- 
- 大正2年（1913）2月11日、桂内閣総辞職する。

2月21日、山本権兵衛内閣成立する。朝日は桂内閣同様非立憲的なものとして反対をつづける。

7月16日、久松定憲死去する。享年61。勤続27年、整理課長・人事課長等を歴任した。

10月3日、この日より三日間、日米野球戦を豊中グラウンドにおいて主催する。

10月——、11日公爵桂太郎、22日公爵徳川慶喜、いずれも死去する。

11月1日、上野理一社長に、村山龍平監査役となる。

12月14日、大朝本社屋新築準備として堂島川南岸の仮館に移転する。

- 大正3年（1914）1月23日、海軍汚職問題起る。わが社は軍紀の肅正を叫び大いにこれを攻撃する。

2月15日、海軍汚職問題よりひいて憲政擁護運動となり、帝都に大混乱を起す。この日原内相邸を訪問した東朝芳賀栄造記者は、同邸で壮士のため暴行を受け、都下新聞記者連盟の大問題となり、次いで内相弾劾運動となる。

2月23日、東朝芳賀記者刃傷事件につき内相問責記者大会を大阪に開き、村山龍平開会の辞を述べる。

3月15日、内閣弾劾関西記者大会開催、村山龍平座長となる。

3月19日、島崎藤村の「仏蘭西だより」を掲載する。

3月24日、山本内閣総辞職する。

4月11日、皇太后陛下崩御される。哀辞を掲げて奉悼の意を表する。

4月20日、夏目漱石の小説「こころ」を掲載し始める。

5月24日、昭憲皇太后の御大喪行われ、第一面に誄詞を掲げる。

6月21日、学習院御在学中の山階宮武彦王、賀陽宮恒憲王、山階宮芳麿王、久邇宮朝融王、同邦久王、華頂宮博忠王、山階宮萩麿王の七殿下、東京朝日新聞社にお出になり見学される。

6月28日、オースタリー皇太子暗殺され第一次世界大戦の端となる。大庭景秋（柯公）を露都に特派して欧州大戦の通信に当らせる。

11月1日、村山龍平社長に、上野理一監査役となる。

- 
- 大正4年（1915）1月13日、漱石の随筆「硝子戸の中」を連載する。

1月30日、村山社長は、欧州大戦におけるベルギー国君民の勇敢義烈な態度を壮とし、ロンドン特派中の杉村広太郎をつかわして、ベルギー皇帝に衛府の太刀（備前長船作）一振を献上する。31日皇帝より感謝の親電来る。

4月4日、中野正剛を香港に特派する。

4月6日、欧州から帰朝した杉村楚人冠をして大阪にて欧州の近況を講演させる。

6月1日、新たに帰朝した大庭柯公をして露国観戦を、また中島為喜をして青島観戦を大阪にて講演させる。

6月19日、杉村広太郎をサンフランシスコに開催の世界新聞大会に出席のため、また山口善助を印刷工場・機械視察のためいずれもアメリカに特派する。

8月14日、この日より5日間、第一回全国中等学校優勝野球大会を大阪豊中グラウンドに開催する。参加代表十校。

9月14日、関新吾死去する。享年62。創刊後間もなくわが社に入社して健筆をふるった。後退社し福井県知事となり再び入社した。



10月10日、従来の京都、神戸付録のほかに紀和・東海・北陸・山陽・山陰・四国・九州の七地方版を印刷発行する。これ地方版のはじめである。

11月1日、紫宸殿上御即位大礼の図（和田英作謹写）を絵付録として配布する。上野理一社長に、村山龍平監査役となる。

11月10日、村山龍平、新聞事業功労者として勲三等に叙し瑞宝章を賜わる。

12月26日、放浪牧卷二郎死去する。享年48。特派員として中国各地に活躍し、支那通であった。

---

●大正5年（1916）2月11日、中村不折筆、神武天皇橿原御即位図写真版付録を発行する。

3月14日、ナイルス滋賀県八日市飛行場にて宙返り飛行をなし、本社松本写真班員同乗、日本における最初の機上写真を撮影する。

5月17日、初めて「野球年鑑」を発行する。

5月26日、夏目漱石の「明暗」を連載しはじめる。

6月2日、印度詩人タゴールの講演会を主催する。この日御影村山邸のお茶の会にタゴールを招く。

8月16日、第2回全国中等学校優勝野球大会を豊中グラウンドに開く。上野社長始球式を行う。

10月16日、大阪懷徳堂再興される。村山、上野両社長、西村天囚らの尽力によるところ多い。

10月25日、大阪本社、新築落成する。

11月1日、大阪本社新築竣工記念絵付録「朝日」（和田英作画、石版彩色刷）をわかつ。村山龍平社長、上野理一監査役となる。

12月9日、漱石夏目金之助死去する。享年50。東京の人、英文学者。東大講師を辞して明治40年4月入社し、東朝文芸欄を担当するとともにかずかずの創作・随筆・論策を発表して朝日新聞の紙価を高からしめた。また明治末期から大正にかけて文壇新潮流の先駆をなし、多くの後進を育成して文豪と仰がれた。12日葬儀が行われ、村山社長は特に上京して弔詞を奠した。

12月11日、大阪朝日、仮社屋から中之島の新築社屋に移転する。

---

●大正6年（1917）3月、露国に革命起り皇帝退位する。社員太田三孝を露都に特派する。

12月15日、懸賞小説当選発表。一等「明け行く道」野村愛正、二等「宿命」沖野岩三郎。



- 大正7年（1918）5月1日、唐紹儀夫妻を村山邸に招く。

8月12日、富山県下に米騒動起る。以後各地に急にひろがる。

9月9日、8月25日大朝夕刊に掲載した内閣弾劾記者大会の記事中、新聞紙法に違反の字句ありとして起訴される。小林貞子（村山夫人母堂）死去する。享年92。

11月11日、独帝退位し、第一次大戦休戦となる。

11月28日、欧州大戦講和会議通信主任として客員土屋大夢を特派し、重徳泗水、嶋谷亮輔、渡辺誠吾に協力せしめる。

---

- 大正8年（1919）2月20日、大正7年の米価騰貴の際、救済のため村山龍平金一万円を寄付せるに對し金杯一組を下賜される。

10月3日、村山龍平、子爵岡部長職の三男長挙を養嗣子とし、長女藤子に配する。ワシントンにおいて第1回国際労働会議開かれるにつき労働使節と同船にて美土路昌一を特派し、ロンドン特派員鈴木文四郎、ニューヨーク特派員畑田保次とともに会議の通信にあたらせる。

11月13日、村山龍平、武庫離宮にて、大正天皇の新聞事業に対する御下問にお答え申し上げる。

12月31日、上野理一死去する。享年72。朝日新聞社創業後間もなく入社し、以来村山龍平に力をあわせて社業の経営にあたり、しばしば社長の重責を負い、社運の進展に貢献するところ極めて多く、社内の信望篤かった。特に正六位に叙せられる。長男精一は後に社長、取締役会長を歴任、現在社主、取締役である。

---

- 大正9年（1920）2月17日、村山龍平に對しベルギー国政府よりコマンドル・ロドル・レオポール勲章を贈られる。

7月31日、第7回国際オリンピック競技大会のため名倉閑一をアントワープに特派する。

8月16日、村山龍平嗣子長挙の長女美知子出生する。

10月10日、仏蘭西近代絵画彫塑展覽会を本社樓上に開催する。

10月21日、大朝社樓上に夏目漱石遺墨展覽会を開く。

11月9日、東京朝日新聞社、滝山町の新築落成する。

---

- 大正10年（1921）2月2日、坂崎坦をフランスに留学させる。

5月20日、村山社長の購入にかゝる世界大戦ポスター展を大阪新市庁舎樓上に開催する。（東京では6月16日から4日間、東朝社内を開く。）

8月23日、東宮殿下、欧州の御旅行をおえさせられ御帰航の途につかれたので、村山

社長はお召艦あて無電をもって御機嫌伺いをする。

11月6日、来朝中のイギリスの新聞王ノースクリフ卿大阪本社を訪問する。わが社では社賓として歓迎し、紅丸を借切って瀬戸内海を遊覧、村山社長ら同行する。

11月22日、朝日後援にて島崎藤村の誕生50年記念文芸講演会を東朝社樓上に催す。

11月25日、皇太子殿下摂政とならせられ、大詔を發せらる。

11月——、ワシントン会議に関するエッチ・ジー・ウェルズの論文の日本における翻訳権を獲得する。

---

●大正11年(1922) 3月18日、岡本一平、世界漫遊の途に上る。

5月2日、白耳義第二皇子、大阪朝日新聞社に來訪され、村山社長に先年献上した太刀に対して御挨拶あり、社内を見学される。

6月16日、朝日後援にてフランス名画展覧会を大阪府立商品陳列所に開く。

6月20日、篁村饗庭与三郎死去する。享年68。東京朝日創刊以来劇評に小説に随筆に紙上に筆を絶たなかった。文壇人としても知名度、さきに退社して老後を楽しんでいた。

12月11日、大毎と協同後援でアインシュタイン博士の相対性原理講演会を大阪中之島公会堂に開催する。

---

●大正12年(1923) 1月5日、明治天皇御集謹解(文学博士佐佐木信綱)を発行する。

9月1日、関東地方に大地震あり、被害甚大にて東京朝日新聞社も罹災全焼する。電信電話等不通となったため、大朝社から記者・飛行機を特派して実情の探查に努める。東朝社では、直ちに帝国ホテルに臨時事務所を設けて報道任務に心死の努力をつゞけ、大朝社では諸方面の情報を集めて四回にわたり号外を発行する。

11月30日、村山龍平に対しフランス共和国政府よりシュヴァリエ・ロンドル・ド・ラ・レジオン・ド・ノール勲章を、続いて同13年同国よりクラン・オフィシュ・ドラング・ド・ランナン勲章を、また昭和3年にはコマンド・ド・ロルドル・ド・エトワール・ノアル勲章をそれぞれ贈られる。

12月19日、ルビ付活字を創始した松田幾之助、病気のため退社する。勤続43年。社長より特に彰功状に添えて金一封を贈る。

---

●大正13年(1924) 1月25日、東宮御成婚祝賀のため、天皇皇后兩陛下および皇太子殿下、久邇宮殿下へ、村山社長から本社飛行機便により鮮鯛を空輸し、献上する。

1月26日、皇太子殿下御成婚当日、全紙面をロトグラヴィア製版にて印刷する。日本新聞界最初のものである。

2月7日、吉野作造、柳田国男入社し、編集顧問兼東京朝日論説委員となる。

7月29日、天囚西村時彦死去する。享年60。碩園とも号した。鹿児島県種子島の生れ、東大古典講習科に学び、文才豊かにして青年時代は文芸をたしなみ、漢学に造詣深かった。明治22年入社して「東京公論」「大阪公論」の論説記者となり、雄健な文章をもって堂々の論陳を張ったのち大阪朝日の筆勢を司り、勤続30年、大正8年退社して社友となった。

- 
- 大正14年（1925）1月24日、仏国答礼使として山県有朋神戸出帆、わが社より町田梓楼同行する。
  - 3月10日、東京有楽町の東京朝日新社屋、地鎮祭を執行する。
  - 3月12日、従来本社棋譜のために専ら尽力した坂田三吉八段を名人に推薦と決定する。
  - 4月1日、都市計画による大大阪記念号を作り、大阪市の鳥瞰図10数葉を四頁に収めグラヴィア印刷にて発行する。
  - 5月25日、石井光次郎、取締役役に就任する。
- 

- 大正15年（1926）1月13日、訪欧飛行四勇士、摂政宮殿下に拝謁する。14日重ねて東宮仮御所にて村山龍平社長とともに謁見する。

1月15日、村山龍平、さきに三重県田丸尋常高等小学校へ金一万五千円を寄付したによって紺綬褒章を授与される。

4月7日、霞亭渡辺勝死去する。享年62。別号碧瑠璃園。在社33年。「渦巻」ほか傑作小説を多数発表していずれも好評を博し、朝日の紙価を高からしめた。9年前退社後は客員となっていた。

4月9日、渋川玄耳死去する。享年55。明治40年より大正2年まで在勤し、軽妙の才筆をもって文名高かった。藪野椋十のペンネームで著した「東京見物」「上方見物」「世界見物」は有名である。

5月24日、村山社長、社員二百余名を御影の自邸に招き園遊会を催す。

10月4日、スウェーデン皇太子同妃両殿下本社へ来訪され、村山社長の秘宝を大朝社楼上に陳列して展覧に供する。

10月9日、大阪朝日会館落成し開館式を挙げる。

10月10日、朝日会館記念講演会をこの日より三日間同館にて開催する。村山社長「朝日新聞の成長」なる題下に一場の講演をする。

11月20日、初めて「日本美術年鑑」を発行する。

12月25日、14年末より御不例であった天皇陛下、この日午前1時25分葉山御用邸において崩ぜられる。本社は全紙面に黒枠を施し、第一面に奉悼文を御写真とともに掲げて弔意を表する。新帝踐祚あり、昭和と改元される。

- 昭和元年（1926）12月27日、大阪本社送りのニュース写真原稿を載せた東風号（河内飛行士操縦）は午後10時4分立川を出発、28日午前1時5分大阪城東練兵場に原稿を投下し、初めて東京・大阪間の夜間飛行に成功する。

- 
- 昭和2年（1927）4月1日、東京朝日新聞社、数寄屋橋畔に新築落成する。

6月3日、30日まで、東朝社主催で「明治大正美術展覧会」を東京府美術館に開く。入場者17万人におよぶ。

7月25日、幕末以後の史料展覧会を大阪朝日会館に催す。

8月1日、山内愚僊死去する。享年66。関西画壇の先達で、多年に亙り紙上に彩筆をふるった。

- 
- 昭和3年（1928）1月24日、村山龍平、帝室林野局より伊勢田丸城址（九町九段歩）の买下を受け、これを公園として田丸町に寄付する。

2月12日、日本ラグビー協会総裁として阪神甲子園のラグビー東西対抗選手権大会に臨席された秩父宮殿下は、同日午後御影の村山社長邸にお成りになる。

7月20日、山本有三の小説「波」を朝刊に連載する。

11月10日、村山龍平は御即位礼賢所大前の儀、紫宸殿の儀、大饗夜宴に参列し、勲二等瑞宝章を授けられる。

- 
- 昭和4年（1929）1月1日、科学、学術、スポーツその他の文化に貢献したものを表彰するため「朝日賞」を設定する。

1月4日、帝国飛行協会から本社航空部長村山長挙、同次長野田安重、久松定夫に対し、緑色有功章を贈られる。

1月15日、この日の夕刊より高橋是清翁口述の「是清翁一代記」を連載する。（後単行本として出版）

3月10日、世界新市場視察のため野田豊、細川隆元、高橋増太郎、矢部利茂、田中正男、八木長人、野村宣らを特派する。4月7日まで開国文化展覧会を朝日会館に開催する。

6月6日、天皇陛下関西行幸に際し、村山社長大阪城内行在所における賜餐の宴にお招きを受け、新聞事業につき詳細な御下問にお答えする。

10月2日、神宮式年遷宮祭の儀に、村山社長有資格者として参列し、記事報道のため松浦直治、花光健三、香川順孝らを特派する。

- 
- 昭和5年（1930）1月6日、宇田川文海死去する。享年83。大朝創刊時代の小説作者

で、関西新聞界の古老であった。

1月25日、第一回朝日賞を坪内逍遙、栖原豊太郎、前田青邨、入江稔夫に贈る。

1月——、村山龍平に対しドイツ共和国政府よりドイツ赤十字第一等名誉章を贈られる。

4月8日、村山龍平、日本新聞協会総裁東久邇宮殿下から、新聞事業功労者として顕彰される。

11月14日、浜口首相、東京駅にて狙撃され重傷を負う。

12月23日、村山龍平、貴族院議員に勅選される。

- 
- 昭和6年（1931）1月25日、昭和5年度朝日賞を佐佐木信綱・山本忠興・川端龍子・内田実・鶴田義行に贈呈する。

5月1日、三重県田丸町民により、先に村山龍平が寄付した同町城山公園に懐郷の歌の記念碑を建立し除幕式が行われる。

- 
- 昭和7年（1932）1月25日、昭和6年度朝日賞を星野正三郎、山本六三郎、南部忠平、牧野正蔵、織田幹雄に贈る。

1月29日、上海に日華両軍衝突する。

5月18日、大夢土屋元作死去する。享年67。明治37年入社し、たびたび海外に特派され、文才に富み博学をもって知られた。

7月4日、村山龍平、三重県田丸町旧屋敷跡を同町に寄付する。同町では昭和9年4月3日こゝに「村山龍平翁記念碑」を建て、香雪園と名づけて遊園地とする。

- 
- 昭和8年（1933）1月25日、昭和7年度の朝日賞を高楠順次郎、満谷国四郎、鈴木純一、中谷金作、宮崎康二、遊佐正憲、豊田久吉、横山隆志、西竹一に贈る。

3月3日、東北地方に大地震と大津浪あり、速報につとめるとともに義金を募集し、見舞金を贈る。

8月——、村山龍平、軽脳出血にかゝり静養につとめる。

10月6日、満州国視察中の上野取締役会長は、新京において溥儀執政を訪問する。別に村山社長より太刀・花瓶を献上する。

11月24日、社長村山龍平、兵庫県御影の自邸にて死去する。享年84。勲一等瑞宝章をたまわり、従四位に叙せられる。

11月29日、社葬の礼をもって大阪本社において葬儀を行う。

---

#### Ⅳ. 香雪美術館について

香雪美術館は、朝日新聞の創立者、村山龍平（1850～1933、号香雪）が蒐集した美術品を収蔵・展示する公益財団法人の美術館である。美術館は、神戸市東灘区御影郡家2丁目12番1号にその瀟洒な佇まいを見せている。昭和48年11月、香雪翁40年祭を期して開館した。近隣には弓弦羽神社があり、鬱蒼とした樹々に囲まれていてまわりの環境が神韻を帯びている。とくに驟雨の時は一層水墨画の世界の中にいるように感じられる。

香雪美術館の村山美知子理事長執筆『香雪美術館名品撰—茶道具編』に次の様に記されている。<sup>12)</sup>

明治33年頃、龍平翁は神戸御影の地を取得し、明治42年、先ず西洋館を建て、引き続き、茶室、日本館と造築しています。茶室棟は茶室「玄庵」（げんなん）を中心に玄関・寄付などを配し、大正に入ってから、日本館から廊下を通して茶室「香雪」を設けました。「玄庵」は、戴内流家元の茶室「燕庵」（えんなん）の忠実な写しとして、相伴畳付三畳台目の規矩に則ります。明治44年に上棟されたとの、節庵銘の棟札が上がっています。

館蔵品は大別して武具・甲冑・刀剣と仏教美術・茶道具類<sup>13)</sup>である。

村山龍平は、時代を見通す眼を持っていたが、それは美術品だけにとどまっていた。建築美についても時代を見通していた。

平成23年（2011）、龍平が住んでいた住宅、「旧村山家住宅」が、国重要文化財に指定されたのである。

#### おわりに

無説己之長<sup>14)</sup>

香雪

己の長を説くなかれ、自分の長所を自慢するなという意味である。村山龍平の奥ゆかしい謙譲の心をいっている。

朝日新聞を創刊した村山龍平は、また一流の鑑賞眼を持つ風流の人でもあった。その古美術品の収集が、神戸市御影町の香雪美術館の誕生につながっている。そして、それは、いずれも社会との絆を大切にする村山龍平の精神の現れのなせることと思われるのである。「世に古来、立身出世の財界人が多くいるが、龍平翁のごとく、終世自分の生まれ故郷を愛慕し、莫大な寄進をなした篤志家は外に見ない。」と『三重県玉城町史下巻』第八節に記されている。昭和3年、田丸城址を玉城町に恵贈したこと、また、「翁の意志を継承し、今もなおそれを続けられているような話は他には全く聞かれず、

まず皆無と言えるであろう。ここにこそ龍平翁のみならず、村山家御子孫の立派さ、偉大さがある。」と結ばれている。この小論のテーマである村山龍平記念館の成立もその考えの流れの上に形成されているのである。記念館と社会との関係は、人間と社会との関係でもあり、人の心を大切にする村山龍平の現代社会へのメッセージの形象化されたものであったといえる。

幾千とせ かわらぬことを 祈るなり

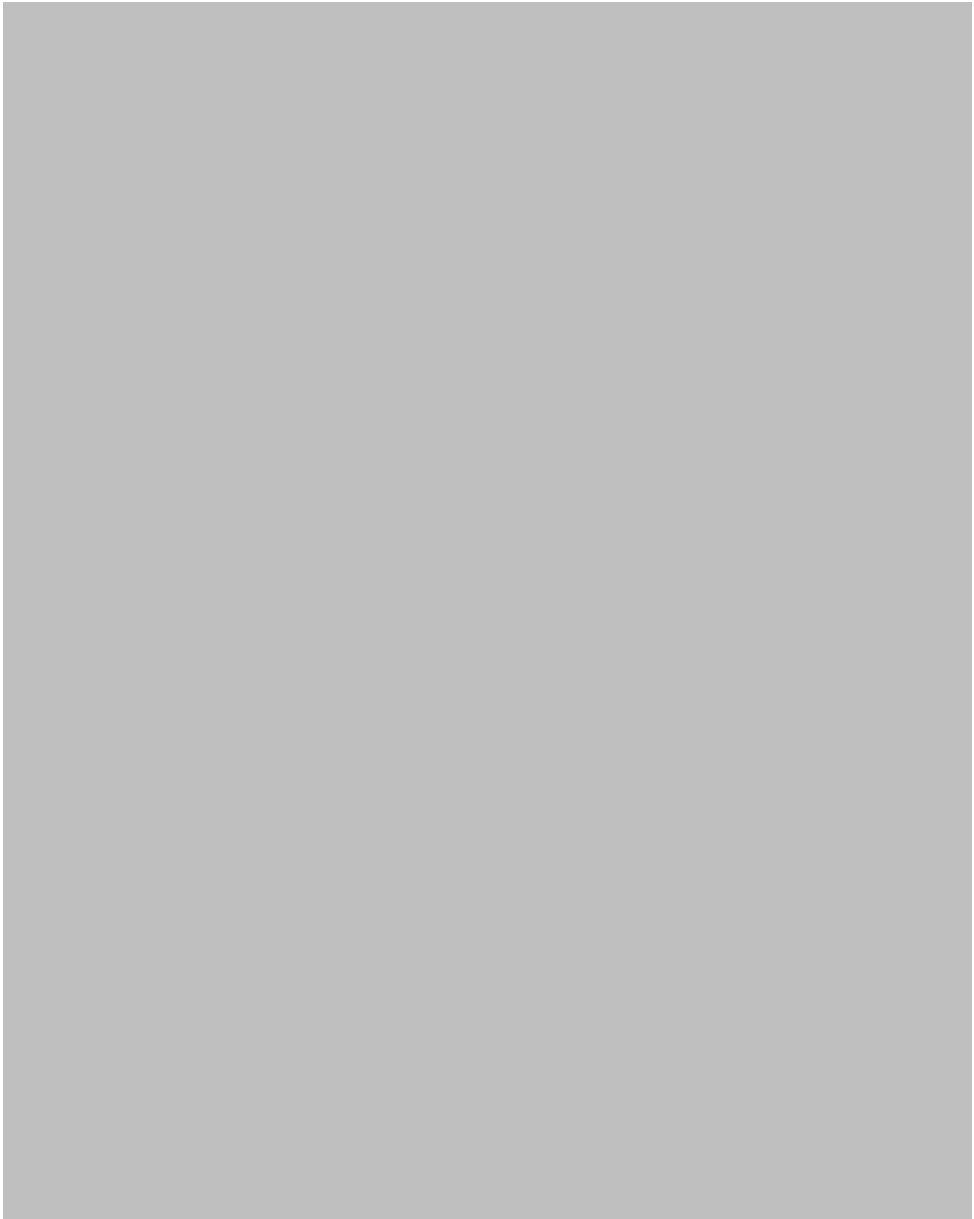
この城山は <sup>15)</sup> このさとの神



①洋館



②応接間



③階 段

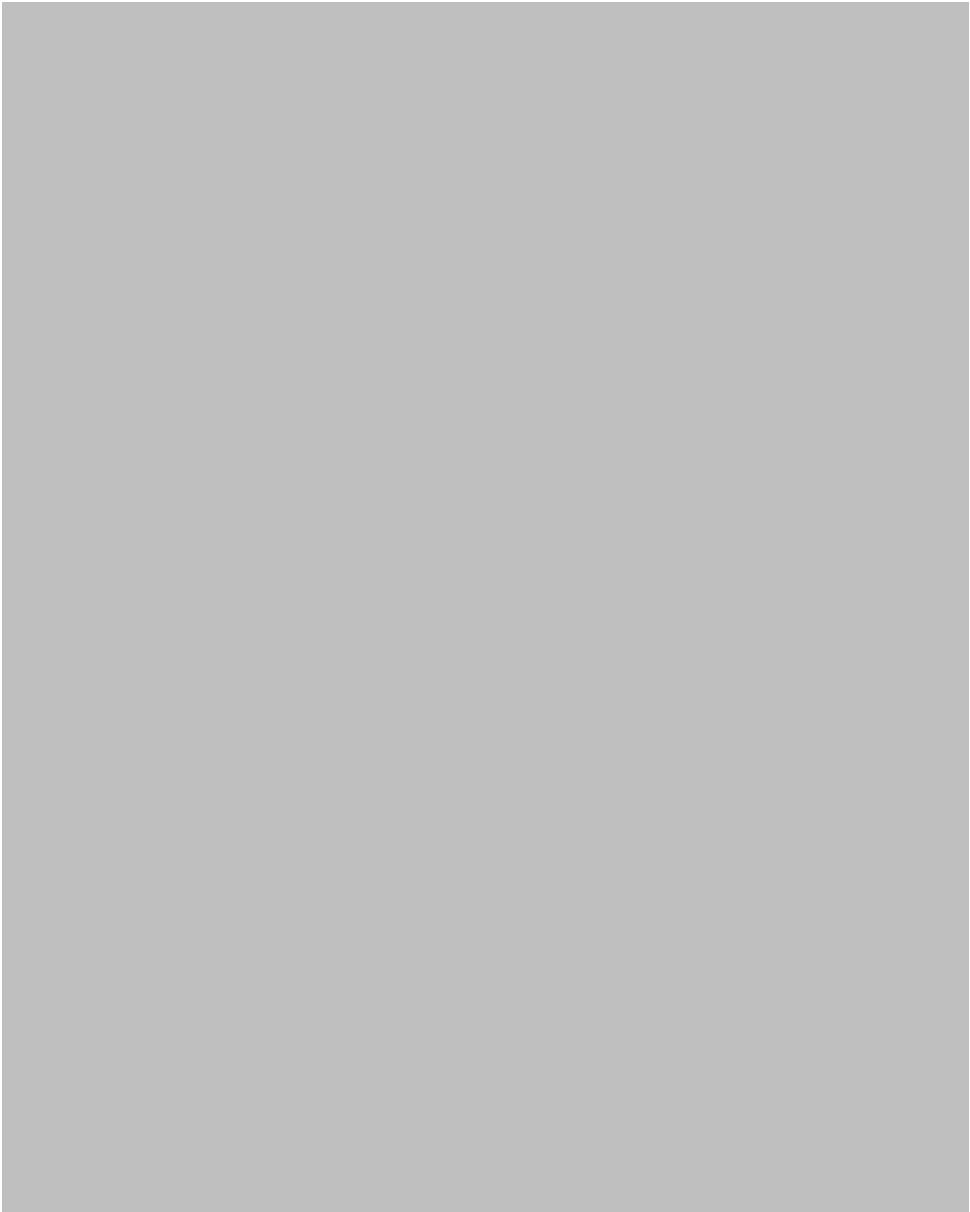




⑤車寄せ



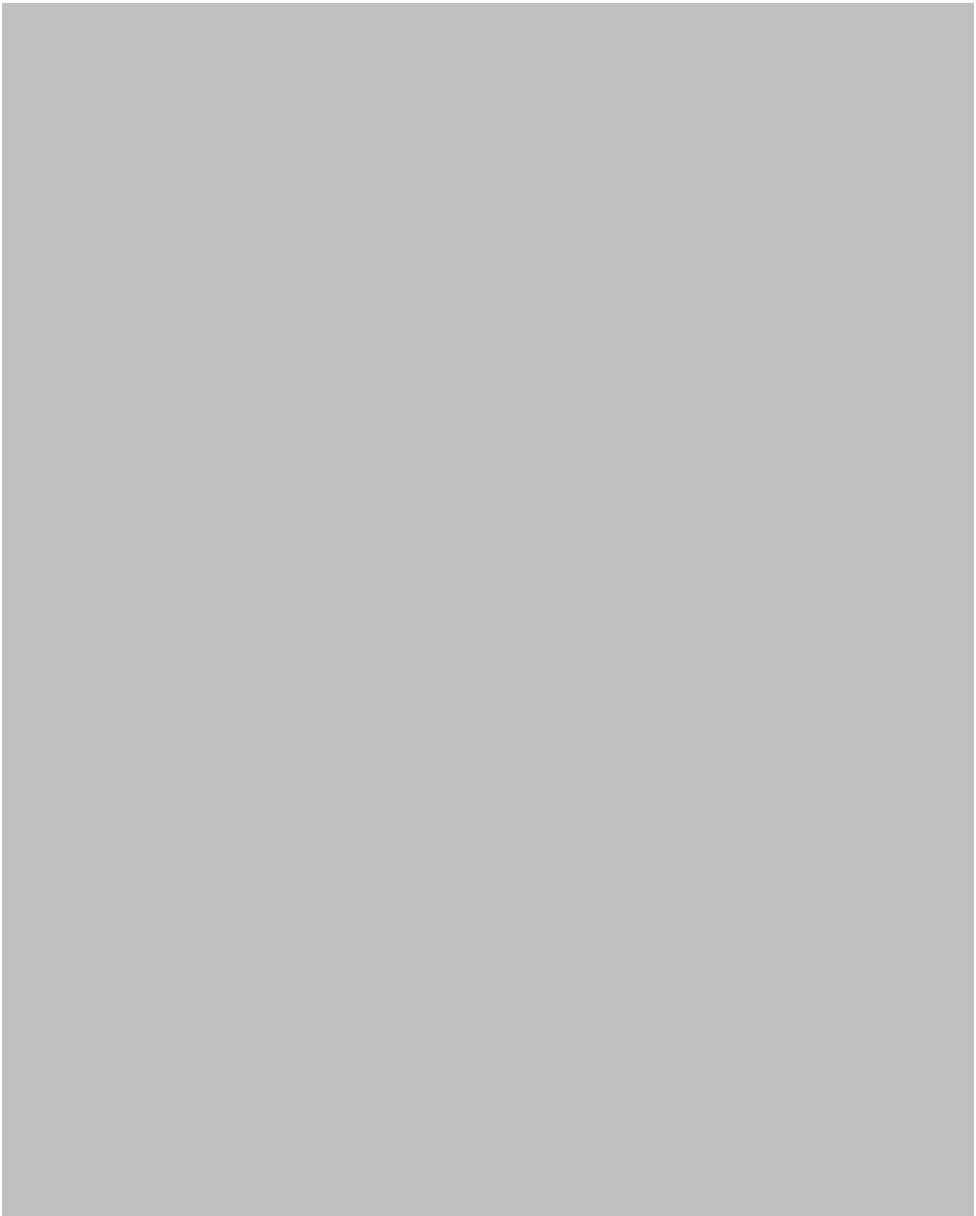
⑥玄関棟内部





⑦書院棟 大広間

⑧茶室棟 玄関



⑨前 庭





⑩玄 庵



写真は香雪美術館提供

図版 (写真の解説資料については、香雪美術館の「広報用資料・旧村山家住宅について」から抜粋した。)

## 旧村山家住宅

### ①洋館 ②応接間 ③階段

年代 明治42年(1909) 設計 河合幾次 施工 竹中工務店

**河合幾二**(かわい・いくじ) 元治元年(1864)～昭和17年(1942)

旧制一高から東京帝国大学建築学科へ進み、通信省技師・台湾電信建設部技師を歴任後、大阪に移って河合工作所を開いた。作品としては、大阪中央電話局本局(明治28年1895)・大阪商船会社本社(明治38年 1905)・同社門司支店(大正6年 1917)などがあり、村山龍平郎もまた代表作といえる。また事業家として、日本電気興業社長、市岡土地(株)・東洋コンプレッソル(株)・大八洲電気鋳鉄(株)各取締役、亜鉛電解特許権所有などの役職にあった。一高・大学を通して伊東忠太と同期で、他に旧帝国図書館を手がけた真水英夫、司法省営繕課長だった山下啓次郎らも同様だった。

### ④和館 玄関棟 ⑤車寄せ ⑥玄関棟内部

年代 大正時代後期

### ⑦書院棟 大広間

年代 大正7年(1918) 設計 藤井厚二 施工 竹中工務店

**藤井厚二**(ふじい・こうじ) 明治21年(1888)～昭和13年(1938)

福山市の豪商「くろがねや」藤井与一右衛門の次男として生まれる。東大建築学科を卒業し、竹中工務店に入社。村山龍平郎・大阪朝日新聞社・橋本氣船ビルなど著名建築を手がける。竹中工務店退職後、武田五一の推薦で京大建築科助教授、のち教授となる。京都大山崎に広大な一万坪の土地を購入し、10年間に自邸を5回建築する実験を繰り返し、その居住性を検証すると共に岩波書店から『日本の住宅』として発表したことが著名。その住宅は「聴竹居」と命名され(1927)、近代建築史に異彩を放っている。こうして住宅を一貫した研究テーマとし、環境工学を基礎にして科学的な設計方法論を展開した。着眼は畳式と椅子式の生活を和風住宅のなかに実現することで、今のリビングルーム利用の元祖ともいえる。

### ⑧茶室棟 玄関 ⑨前庭

年代 明治時代末期～大正7年頃

### ⑩玄庵

年代 明治44年(1911) 大工棟梁篤松

**藪内節庵**(やぶのうち・せつあん) 明治元年(1868)～昭和15年(1940)

藪内家9代竹露の次男として生まれ、10代休々斎(竹翠)に養育されて随竹庵4世となった。明治41年、京阪神の著名な数寄者を集め「篠園会」を結成し、大阪高麗橋に道場を開いて相互に掛釜をした。村山玄庵・野村得庵の他、三井高棟・住友春翠らを客員に迎え、会の名聲は東西に響いた。茶道具の鑑識にも優れ、玄庵が道具を求めるときは常に同席させたと伝えられる。また建築・作庭をも得意とし、三井家本邸をはじめ、実に多くの仕事を手掛けるなど、当時の有力な数寄者たちから信任を得ていた。

図版

村山龍平記念館

- (a) 全景 (b) あいさつ文 (c) 村山龍平翁胸像 (d) 龍平翁書 (e) 朝日新聞第1号  
(f) 展示室 (出土品) (g) 展示室 (出土品) (h) 展示室 (刀剣、甲冑)  
(i) 展示室 (龍平翁紹介展示) (j) 展示室 (刀剣、甲冑)  
(k) 展示室 (襖障子)

(a)



(b)



(c)



(d)



(e)



(f)



(g)



(h)



(i)



(j)



(k)



写真(a)~(k)は、塩田昌弘撮影

## 注と参考文献

- 1) 『日本詩歌小辞典』塩田丸男著p.111、白水社、2007.9.15
- 2) 『写真集 和歌のふるさと』長谷章久著p.17、大修館書店、1990.5.7
- 3) 『国華』第1324号、水尾比呂志執筆p.36、国華社・朝日新聞社、平成18年2月20日本文に水尾比呂志により執筆された〈『国華』庇護の形跡—村山龍平と上野理一—〉の興味ある文章が掲載されている。

『朝日新聞』創業と経営の雙頭、村山龍平<sup>リョウヘイ</sup>と上野理一<sup>リイチ</sup>に関しては、いずれも社史編修室（現・社史編修センター）編に成る『村山龍平傳』（昭和二十八年刊、以下『村山傳』と略稱）と『上野理一傳』（昭和三十四年刊、以下『上野傳』と略稱）の、龐大な資料に基いた活潑な傳記が刊行されてゐる。但し兩書とも非賣の大著で、一般はもとより同社関係者の閱讀も容易ではない。この二書の普及版化が行はれるならば、わが國の代表的新聞人であるばかりでなく有数の文化人でもあった兩氏の、人格・業績とその存在の意義の大きさ重さは、現今の實業人の貧寒な社會性文化性に對する覺醒の警鐘となるのみならず、知識人文化人全般にも少からぬ刺戟を寄與するであらう。兩著が該社の出版物の一環に加へられることを望みたい。

本論文の〔目次〕Ⅲ．村山龍平の生涯を執筆するにあたり、上記の『村山龍平傳』（昭和二十八年十一月五日印刷、二十四日発行（非売品）、朝日新聞大阪本社社史編修室、発行所朝日新聞社）を根底資料として執筆した。『村山傳』は縦書きであったが、小論を横書きに執筆するに及び、原則として漢数字はアラビア数字で表記した。また、字数のこともあり、オリジナルの文章の内容を変えない程度に、塩田が引用の際、適宜、抜粋したり加筆したりした。

- 4) 『三重県玉城町史 下巻』第六編 郷土の人物、第二章 近代を照らす群像、第八節 村山龍平、六 龍平翁の絶えざる郷土愛—町は大恩を蒙る。p.1132～p.1135、平成17年3月25日玉城町発行、編纂三重県玉城町史下巻編纂委員会
- 5) 『三重県玉城町史 下巻』p.1118、平成17年3月25日玉城町発行、編纂三重県玉城町史下巻編纂委員会
- 6) 前掲書p.1119
- 7) 前掲書p.1119
- 8) 前掲書p.1120
- 9) 前掲書p.1120
- 10) 前掲書p.1120～p.1121
- 11) 前掲書p.1121
- 12) 『香雪美術館名品撰 茶道具編』あいさつ文 p.3、理事長村山美知子執筆、香雪美術館編集・発行、便利堂制作、平成22年4月1日初版
- 13) 表千家同門会機関誌『同門』1997年5月号〈310号〉抜刷、「茶の湯のある美術館 香雪美術館（下）村山龍平翁 その蒐集の全容」小田榮一執筆、p.20～p.21
- 14) 『三重県玉城町史 下巻』p.1131、龍平翁筆五字一行（縦書）
- 15) 『三重県玉城町史 下巻』p.1133

◆本論執筆にあたり、公益財団法人香雪美術館学芸員仙海義之先生の貴重な御講義と御協力を賜り、厚く感謝の意を表します。

◆玉城町教育委員会、村山龍平記念館の資料の御提供を賜り、厚く感謝の意を表します。『三重県玉城町史上巻』、『三重県玉城町史下巻』、『三重県玉城町史近世史料集』（第一巻～第六巻）